

床の上に起き上つたのは、室中の全員殆ど同時であつた。

「敵戦闘機〇〇機躍進す、明朝歸徳を攻撃すべし」との本部の命令だ。「來ましたね」「占めた」「よし」と思ひ思ひの聲に歡喜の心は抑ふべくもあらず。心は早や敵地に飛んで既に敵を呑んだ概がある。

出動部署の方策は決つた。「どれ夜明迄もう一眠り」と寢床にもぐり込んだのであつたが、胸の高鳴りは鎮め得ず、殊に今の今迄夢に見たイー15の姿は餘りにもはつきりと眼底に残つてゐる。出征以來私の夢は正夢との折紙が附けてある事とて、きつと敵機に見ゆるとの豫感さへある。

あれやこれやと今日の戦闘を思ふと、眠るどころではない。誰しも同じと見えてあちこちで盛んに寢返りを打つてゐたが、其中一人二人と起き上つて煙草を喫ふといふ有様であつた。

此のときふと隣を見ると、川原君のみ只一人スヤ／＼と心地よい寢息をかいて寢てゐるのであつた。これはいかぬ。中隊としては既に何度も敵にぶつかつてゐる。今日が初めての戦闘ではあるまいし、此のやうな事では年甲斐も無い。何だ

か川原君に負けたやうな氣になつて、眠るべく大いに努めたのであつた。然しどうしても川原君のやうにはとう／＼熟睡が出来ず、ウト／＼した頃には早くも夜が白んだといふ有様であつた。此の日豫期せる如く敵機に遭遇する事が出来た。而も未だ經驗した事のない不愉快な戦闘であつた。そして私の戦闘指揮の失敗から遂に至寶川原君を失つたのであつた。

中隊で一番撃墜機數の多かつた川原君は自若たるものがあつた。そして戦死の前夜も斯くの如く熟睡せられたのであつた。果せるかな、其の戦闘振りは悠揚迫らざる立派なもので、激戦の中にも僚機に功を建てしむるの奥床しさを忘れなかつたのである。

川原君は責任觀念の厚い人であつた。命ぜらるると否とを問はず、苟も自分のやつた事には最後の決着迄やり通さねば承知しない。或る日、臨時に擔任業務以外の演習を一日計畫實施せしめた事があつたが、計畫の周密内容の充實はいふ迄もない。其の目的達成の爲には前以て熱心な豫備的訓練を行ふし、又終了後は疲勞其の極に達したるを厭はず、演習に於て實施不十分な所を補備し、更に日を改

めて圖上研究に依り其の印象を深からしむるの熱心さであつた。擔任業務以外の教育訓練に於てさへ斯くの如き熱意と責任感との現れを見て、良き分身者を得たと、著任直後の自分は涙の出る程嬉しかつたのであつた。

川原君は素直な人であつた。上からの要求は縦ひ無理があつても曲解などすることなく素直に受け容れるの雅量があつた。色々意見のある事柄も、やたらに議論に走る事なく、其の實質を取つて之を先づ實行に移すのが常であつた。而も自らは心中に信念に基く立派な意見を持つてゐるのである。此の性格は操縦にも其のまま發揚せられてゐる。自分の經驗した範圍では川原君程素直な素質に恵まれた操縦者を見た事はない。言はれたことを即座に其のまま實行に現すといふ有様で、従つて訓練の回を重ねる毎にメキ／＼と技術は向上するので、教へる身にとつては是程の樂はない。

川原君は又年にも似合はぬ程の落著きを持つてをられた。此の沈著さは日常の業務にも遺憾なく發揮せられ、殊に幾度かの戦闘には良く善戦し名編隊長たるの貫録を十分に持つてをられた。然し此の落著きは決して君の老成を意味するもの

ではない。落著いた其の中にも若さは十分に持つてをられた事は勿論である。

川原君は又となき部下思ひであつた。演習に於て、日常の業務に於て、常に兵と其の勞苦を共にするのが常であつた。或るとき、自分の至らぬ處から兵を營倉處分にするの止むなきに至つた事があつた。丁度冬の眞最中であつたが、教官であつた川原君は一夜を兵と營倉に送つて諄々と諭されたのである。蓋し兵の感激は絶大なものがあつたであらう。夜半川原君が眼を醒すと、兵の上衣が胸に掛けであるのである。何と麗はしき上下の親愛ぞ。

戦地に於ても飛行機の整備は何時も機體と一緒にある。自らは空中勤務者でありながら、明日の出勤を控へて深夜に及ぶ迄機體の整備に任ずることも少くなかつた。

僚機が敵地に不時着するや、敵弾を物ともせず、著陸救援を志したあの彰徳城外の悲壯なる行動、或は又敵機を撃墜するや僚機に其の功を委ぬるを常とした心事等は、何れも川原君の性格を遺憾なく現してゐる。川原君の頭腦明晰なことや操縦の上手であつたことはいふ迄もない。本當に惜しい事をした。川原君を戦死

させたとき、川原君個人に對し又御家族に對するよりもつと國家、國軍の爲に申譯ないと思つたのが私の心事であつた。或は私自身の爲の涙であつたかも知れない。

右の一文を草せられた第三十七期加藤建夫少將は人も知る空の軍神である。加藤軍神の功業に就ては既に博く喧傳せられてゐるが、周知の如く軍神は極めて情誼に篤い人であつた。今其の一面を日記の文面によつてうかがひ、其の死して尙惜しまるる所以を偲んでみよう。日記には到る所に部下を思ふ切々たる至情が綴られてゐるが、川原中尉に關する記載は隨處に之を發見することができる。日記は内地出發の記事に始る。

七月十九日(昭和十二年)

三時半床を蹴る。星なきも晴天を望み、先づ幸先よきを喜ぶ。四時半、隊に赴き最後の身の廻りの整理を行ふ。

五時部隊長の訓示、引續き將校集會所に於て、御眞影奉拜を行ふ。決意するところ愈々堅し。此の頃より次第に濃霧加はり離陸不可能なるの状態となり出征第一歩とて稍くさる。

中隊編成完結せるを以て一同を集め注意を行ふ。

一、軍人の本分たる忠節を戰場に於て盡くし得るは吾人の本懐之に過ぎず。
一、日頃戦争に勝たんことを目標として訓練しありしを愈々如實に發揚し得るに至りしは誠に喜びに堪へず。

一、正義の爲に國軍は起ち、各人各機は出帥準備剩す所なし。只今後は團結の強固に依り戦力の遺憾なき發揚を期せんのみ。

一、健康に留意すると共に軍紀を振作し完全に御奉公し得るを要す。

七時三〇分、濃霧全く散じたるを以て乾盃を行ひ、愈々出發準備にかかる。家族一同にも訣別し八時出征のスタートを切る。

八月四日 (前略) 本日より官舎に移轉し、久振りに疊の上に寝る。川原、中尉に昇進。行李到着せるを以てピーナットにて心より祝す。

九月三日 (前略) 十五時三越及家庭より小包來る。子供のやうに樂し。川原中尉にも來り、愉快なる夕食を喫す。

九月十八日

六時より部隊命令に基き、羈縣附近の敵狀を搜索せしむ。

稍發熱せるを以て宿舍に在りしに、澤田より中村伍長のみ、次いで石川軍曹のみ歸還せるの電話あり、大いに案じありしに、約二十分にして川原機の爆音を聞き歡喜に堪へず、思はず快哉を叫ぶ。

飛行場に馳せ著け今更の如く川原中尉の元氣なる姿を眺めたり。

九月二十八日 午前調査通信及單機戦闘を実施す。午後兵の一部を外出せしむ。

川原と共に種々買出しに出掛く。本日は小生の誕生日なるを思ひ出し、偶然豪華なる晩となれり。買出し品目並に御馳走左の如し。

特製ビフテキ、野菜サラダ、芋、キャベツ、白菜、ナス、ナスバタ焼、アスパラガス、白桃罐詰。

十月七日 九時川原中尉を長として歩兵を加へて約二十名餘を以て撃墜機現場に派遣、資料を蒐集せしむ。時々連絡機を派遣するに、現場への到着意外に時間を要するもの如し。

正午稍前、重爆三機飛行場上空を通過南進せるを目撃し、直ちに第一編隊を以て追及す。途中齋藤曹長機を見失ひしを以て雲上を索敵しあるものと判断し、暫

く南進せるも不安となり飛行場に引返し、無事著陸しあるを見届けたる後、蒿城上空に急行す。約四十分制空の後、重爆三機の歸還を收容し得たるを以て歸る。

夕刻川原中尉、尙現場附近にありしを以て電燈を投下せしむ。歸還は二十三時頃と判断し、待てどもく歸らず。愈々不安を増し綿密に計畫せずして派遣せるの輕卒を悔む。

歩兵隊よりも心配し連絡あり、派遣せる自動車も不安となり一旦歸る等、大いに案ず。

夜一時半目覺め、將校室を見たるも未だ歸らず。ウトウトとせる頃、三時過ぎ川原中尉颯爽として歸る。無事目的を果して歸り、喜びは言はん方なし。

三月二十五日(昭和十三年) 傳令の足音にイー15との空中戦の夢を破らる。歸德に十數機昨夕前進せりとの密電あり。

本朝八時を期し攻撃せよとの命令に接し、正夢の實現を確信し、勇躍七時五十分出發、五機にて直路歸德に向ふ。第三中隊は碓山に迂回せるを以て直路進入せるに、布板のみにて敵機なし。希望全く失はれ、友軍機數多制空しあるを以て錫

山に向ふ。礪山南方にて、敵戦闘機八機を遠方に發見、後上方に接敵全く奇襲す。第一撃不發にて無念敵を逸す。此の時新なる敵七八機加入し來り、約三十分に互る悲壯なる戦闘を交ふ。一型にて苦心しある部下を思ひ、何とも言ひ難き感想を懐く。常時三乃至四機と交戦、辛うじて四機を撃墜。川原中尉歸還せず。集合全く成立せず。田中は射弾を受け臨城に、齋藤も臨城に著陸の上遅る。關口は大腿部に貫通銃創を受けたるも終始善戦是努む。

三月二十九日 午前偵察隊と連絡索敵演習。戦闘經過報告書を書かんとすれど、川原を思ひ出しては頭統一を缺き進捗せず。夜思ひ切り川原閣下に御手紙を書く。(下略)

三月三十日 川原中尉戦死の状況を家庭及留守隊に手紙にて報ず。筆を執るも涙の種なり。(下略)

三月三十一日 午前留守隊及士官候補生に川原中尉戦死の模様を報ず。單機戦闘の訓練を行ふ。川原中尉の遺品整理、遺髪及遺書あり。覺悟の程歴然。而も心掛の高邁なる感服の至りなり。足利の知友より中尉宛の手紙あり、今や讀む人も

なし。

四月十一日 一日整備。又も悲しき便りを書く。何處迄天は我に試煉を與へんとするか。中川、川原、齋藤、中村、川井。中隊長就任以來の部下を失ふ。何の面目あつてか家族に見えんや。戦力恢復の一途に邁進せんのみ。御奉公あるのみ。四月十四日 八時より感狀授與式あり。終つて川原中尉以下部下戦死者の寫眞を飾り報告式を行ひ訓示す。川原、齋藤に今日の感激を與へ得ざりしが重ね々遺憾なり。

四月十九日 九時川原中尉始め一同の遺骨を送る。折から猛烈なる砂塵にて一天俄かに黄砂に覆はる。恰も歸りたくなしと言ふが如く暗然たり。(下略)

五月十八日 昨日川原中尉嚴父の夢を見る。案ぜられあるを懸念し、早速手紙を出す。(下略)

五月二十八日 七時十分東京著(中略)自動車を驅つて川原邸を訪ふ。川原中尉の寫眞に額づき涙新なるものあり。嚴父始め奥様と御話するとき、萬感胸を衝く。(下略)

斯様な情味溢るる心情の持主であつた加藤軍神も亦、昭和十七年五月二十二日、「ビルマ」の「アキタブ」飛行場に來襲した「ブレンハイム」機を追ひ、之を撃墜すると共に自らも火を發して海中に自爆、壯烈なる戦死を遂げられたのであつた。

思へば振武臺を巢立つた若櫻は、斯様にして或は温かき上官の慈愛に育まれ、或は勵精よく忠實なる部下に守られ、或はまた海外萬里を距つとも嘗て絶ゆることなき肉親の至情を蒙りつつ、眞に後顧の憂なく盡忠報國の赤誠を捧げてゐる。先輩の遺烈は後輩の奮起を促し、雄健の神靈の無言の教は、振武臺の若櫻の魂を日毎に搖り動かしてゐる。いみじくも「ガ」島の一角に於て若林大尉の残した「後に續く者を信ず」の一言は、よく陸士を貫く先輩と後輩との間の默契を喝破したものであつた。「後に續く者、これ我等にあらざして誰ぞ」と、振武臺の若櫻は日毎にたゆみなき突進を續けてゐるのである。

第九章 振武臺の使命

昭和十五年十月二十一日、代々木原頭に於て紀元二千六百年記念觀兵式の舉行せられたとき、陸軍豫科士官學校生徒は陸軍士官學校生徒と共に全軍の先頭に立つて、畏くも大元帥陛下の御前に堂々の歩武を進めたのであつた。其の日の光榮と感激とは、參加全員にとつて何時までも忘れ得ないことであるのみならず、此のことは振武臺の歴史を通じて亦、消えることなき記念の行事であつた。思ふに此等の將校生徒を召させられて、皇軍精銳の先頭に列せしめ給ひたる深遠なる 聖慮の程は、誠に恐懼に堪へざるものがあり、茲に振武臺の重き使命が端的に示されてゐるやうに拜察せられる。

陸軍豫科士官學校は畏くも明治天皇以來數々の御殊遇を忝うしてゐる。生徒達は 皇室の御殊遇を奉戴し、烈々たる 皇運扶翼の大義に生きつつある。日毎に師訓に従ひ、戦友の切磋に育まれ、すく／＼と伸びつつある。將校生徒達は、日毎に

國軍の楨榦たるべき「宿題」を負荷せしめられつつある。そして其の宿題は 大君の醜の御楯として 皇謨に殉ずるの日に於て始めて明快なる解答の與へられるものといふことができる。導く者も導かれる者も、此の一筋に於て繋がつてゐるのである。戦局の益、苛烈を加へつつある最中に開かれた第五十九期同期生會の席上に於て、小林教官は次のやうな講話を試みた。それは現下に於ける無限の感懐をこめたものであり、よく振武臺の使命に觸れたものであつた。即ち、

今や皇國安危の決する時である。各人が「國難に代る存念」を身を以て立證しなければならぬ秋である。佐久良東雄も、

かかるとき心のどこにある民は木にも草にも劣りてあるべきと歌つてゐるではないか。

遠い昔「ハンニバル」のために「イタリヤ」全土を蹂躪せられた「ローマ」人が、今日の「イタリヤ」の場合と異なつて最後の一线に於て踏み留り、能く「ハンニバル」軍を殲滅するに至りし原因は、「ローマ」人が不撓不屈、堅忍持久、必勝の信念に徹し最後迄努力奮闘したからである。

「ガダルカナル」、「アツツ」、「ギルバート」、「マーシャル」などに於ける純忠捨身の烈々たる行動はこれ即ち皇土を護らんとする玉碎である。大東亞戦争の今日の戦局は、正に諸子の逞しい力によつてこそ打破される。諸子は來るべき勝利の子でなければならぬ。蓋し大東亞戦争の勝利は今日に於てではない。それは明日に於てである。明日は未來を意味する。青年は未來であり、待望されるものである。而も青年は必ず實現され得る希望である。

同期生、それは忠烈の同志にして正に次の時代を同じやうに望み、同じやうに考へ、同じやうに導くところのものである。同じ未來を見詰めるものである。次の時代を背負つた青少年、言ひ換へれば次代の將校生徒を同じ心を以て眺めるものこそ眞の同期生である。

諸子は皇國の未來の力である。諸子が潑刺としてゐれば皇國の前途も亦輝かしい。皇國史の明日の頁は諸子の忠義の行動を描かなければならない。

再びいふ。諸子は「國難に代る存念」を發揮して、皇國の爲に純忠以て捨身しなければならぬ。諸子の墓標に忠烈の功業を思ひ感激の涙を流すものは、諸子の後

にすく／＼と成長しつつある少國民である。諸子にのみ大義の奉行を要望するのはない。諸子よりも既に多くの年齒を加へたりとはいへ、自分も亦諸子と共に捨身するであらう。

嘗て校長牧野中將は、振武臺を築立たんとする生徒達に次の如く訓示せられた。

諸子の現在は品性高潔、純眞無垢、洵に神に近きものあり。然れども人の品性は年齒を重ねるに従ひ、或は環境の汚濁に浸染し、或は身邊の利害に左右せられて、却つて其の氣品を逐次低下することなしとせず。功を急ぎ利を逐ひ、物慾を制し得ずして一身を誤り名を失ふもの其の例に乏しからず。諸子の心之に迷ふの日あらば、清淨なりし振武臺の生活を回想し、大聲を發して懐かしき諸子の校歌を唱ふべし、と。

校歌。そこには總てが盡くされてゐる。殊に其の末章には總てが縮約されてゐる。

太平洋の波の上

昇る朝日に照りはえて

天そゝり立つ富士がねの
君のみたてとえらばれて

とはに搖がぬ大やしま
集りまなぶ身の幸よ

譽も高き楠の

深きかをりをしたひとつ、

銳心みがく我等には
赤き心に咲きいづる

見るもいさまし春ごとに
振武の臺の若櫻

隙ゆく駒のたゆみなく

文武の道にいそしめば

土さへさくる夏の日も
星欄干の霜の晨

手にぎる筆に花開き
揮ふ劍に龍躍る

大武藏野の野嵐に

武を練る聲も勇ましく

露營の夢を結びては
水路はろけき駿河灣

身を習志野の草枕
拔手翡翠のあざやかさ

學びの海の幾千尋

分け入る底は深くとも

立てし心の撓みなく
龍の顎の玉をさへ

努め勵みて進みなば
いかで取りえぬ事やある

思へば畏こ年毎に
玉歩の跡も度しげく
學びたまひし學庭ぞ

行幸ましつる 大君の
賤に交りて 皇子の
實に光榮の極みかな

いざや奮ひて登らばや
理想の峰に意氣高く
歩毎聞かずや誠心を

困苦の岩根ふみさくみ
鍛へ鍛ふる鐵脚の
國にさゝぐるその響

ああ山ゆかば草むすも
など願みんこの屍
いつくしみます 大君の

ああ海ゆかば水づくとも
我等を股肱とのたまひて
深き仁慈をあふぎては

跋

長くも 大元帥陛下には昭和十八年十二月九日、陸軍豫科士官學校に 御臨幸遊ばされ、學校の所在地に對し振武臺と 御賜名あらせられた。聖恩の無窮なるに全國民は齊しく感激し、學校は重き使命に一段と自覺を深めたのであつた。

偶、本年二月、開成館の近藤久壽治氏が見えて、天下有識者の注視に應へ振武臺の教育に關する一本を世に出したい、そしてそれは從來巷間にありふれた通俗的なものではなくして、振武臺の教育の眞諦に觸れ、識者の欲求に合するものでありたいとの希望を述べられた。豫て私は斯うした點を、參觀者等への説明資料として誰かに取纏めて貰ひたいと考へてゐたこともあつたので、直ちに賛意を表し上司のお許しを願うた。上司にも之に類似した企圖が方々から持出されてゐたやうであつたが、前記の狙ひがよからうとのことでお許しが出た。

そこで根據精確なる事實を選び、一貫した精神を以て取纏めなければならぬので、其の執筆を本校職員に求めることとなり、戸田吉郎教授に指名した。當初私は間口の狭い、重要事項に徹底した本を希望し、方々の意見を聞いてみたが、さうもゆかぬ點があり、段々間口が廣くなつて聊か通俗的にもなつた。然し執筆者の努力に依り、概ね當初の狙ひは達せられたやう

に思ふ。茲に特に其の勞を多すると共に、各方面より文獻、寫眞等の資料を提供せられ又意見述べられた各位に對し、謹みて感謝の意を表し、又日記類及外装の圖案等の資料を提出したる生徒にも併せて謝意を表す。

尙最後に一言附記したいことがある。實は振武臺の教育といつても、大して變つた事があるわけではないが、總てが切實なる目的に向つて統制せられてゐることは事實である。然しはつきり體系が完成の域にまで達してゐないので、聊か恥づかしい氣持もするが、實際軍の教育に對する要求と採擇すべき新教訓とは日進月歩して止ることなく、従つて體系も絶えず變り、完成は寧ろ進歩の停頓を意味するかもしれないので、今日幾多の未完成不満足のあるに拘らず、赤裸々に披瀝するに決したのである。されば本書に記載するところも明日は改善を見るかもしれない、否見るべきであると考え。然しながら確乎不動の國體と永き傳統とに發する一貫の精神に至つては、嚴として不易であり、本校教育の眼目である。讀者各位、若し本書中の何れかの部分で其の點を認められ、更に尙之が具現の爲學校創意不息の努力をしてゐる點を御把握願へれば、本書の目的は概ね達せられたものと考へる次第である。

昭和十九年八月一日

陸軍豫科士官學校幹事

陸軍少將

宮

野

正

年

附 錄

附録第一 第二回綜合演習第四演習第一問題及其の結論

一、第一問題

創意工夫に關する生徒教育の實績を向上する爲、具體的の指導準據を把握し、特に其の根本となるべき有形無形上の諸件は之を簡明に取纏め、修練の徹底を期せんとす。之が爲別紙統計を觀察し、意見を加へ、一案を作為すべし。

二、結論

第一問題に關し討議したる所を取纏めたる結果左の如し。但統計の觀察は研究の過程と爲したるに過ぎざるを以て茲に記述せず。

(一) 序説

(1) 曩に獨逸の對英戰爭開始せらるるや、其の潜水艦の威力甚大にして英側は船舶漸減の一途を辿り、若し其の狀況を繼續せば結局戰爭不能に陥るの外なきを想像せしめたり。然るに一度英側に於て超短波兵器を創案し飛行機に依り巧に之を利用するの途を工夫するや、二年餘に互り猛威を振ひ續けたる獨潜水艦も、活動殆ど不能に陥りて雌伏一年に垂んとす。今後潜水艦側が何時對抗策の創意に成功し活動を再開するに至るべきやは重

大なる問題なり。

大東亞戰爭勃發に方り、我が戦闘機は其の優秀なる旋回性能に依りて到る所赫々たる戦果を挙げたり。然るに敵側は旋回戦術を避け専ら其の快速に物を言はする戦法を創意せしを以て、我が方は多數の犠牲を生ずるに至れり。爾後幾波瀾を経て我が戦闘機亦速度と航續力とを加へ活躍を開始せし頃、敵機は装甲と火災防止とを創意し、所謂空の要塞の如きは我より如何に攻撃を加ふるも墜ちず、眼中日本機なきかの如き行動を敢てするに至れり。されば我が切齒痛憤の勇士中には、衝突を敢行し敵を道伴れに玉碎する者さへ生ぜしが、最近我が有效なる彈藥創意せらるるに及び、忽ち敵は對策に窮し多大の損害を出しつつあり。今や航空戦は戰場の大勢を支配す。而して其の創意工夫の競争は斯くの如く熾烈を極めあり。

日本陸軍の夜間攻撃は世界無比の威力を發揮しあり。而して其の要は企圖を秘し敵の意表に出づるにあり。此の戦法は世界注視の問題なれば、將來夜間攻撃を速かに看破すべき敵側の創意、更に之にも打勝つべき我が戦法の創意等茲にも熾烈なる角逐を見ると誰か無しと云はん。

(2) 以上は二、三の例を述べたるに過ぎざるも、現代戦に於て創意工夫が決定的威力を現す

ことを看取するに十分なり、而して一方軍が勝れたる創意工夫に成功するや、他方軍の對策奏功する迄は殆ど戰場を制しある實情なり。

- 眼を戰術教育に轉ずれば、數年前迄は未だ戰例に見ざる如き新著想は動もすれば實現性に乏しきものとして顧みられざりしが、今や逆に既に戰例に現れたる戦法の摸倣は價値少なしと目せらるる日を迎へあり。創意工夫の極めて重要なこと以て知るべきなり。
- (3) 今回本校教育に活潑に創意工夫を導入せんとする所以、以上の諸件に依り明瞭なるべく、之が實踐の急なる、亦自ら明かなるべし。

茲に特に一言明確にしおくべきは、如何に新案を必要とすればとて、準據すべき不磨の原則法則を忘れ、足の浮きたる空想に陥るの危険を嚴に戒むるの要あることは是なりとす。

(二) 創意工夫の要綱

- (1) 創意工夫は、皇運扶翼を指す職責完遂の至誠に發し、深厚なる學術、豊富なる體驗に依りて之を進め、鞏固なる意志、不斷の努力に依りて難關を突破し其の目的を達し得るものとす。

- (2) 創意工夫の發足は直接任務達成上の必要、或は將來の豫見に基づく必要、或は既存事

物の不便利改善の必要等廣義の職責完遂の爲考案を始むる點に存す、而して重要な考案に在りては、専心没入、特に眞摯なる思索、生々たる直觀、潑刺たる想像を以て見透したる適正の著想を得ること緊要なり。

卓拔深遠なる著想は各人の創造的天稟に依るものありと雖も、不斷の努力修養に依りて之を凌駕し得べし。

- (イ) 眞摯なる思索の基礎たらしむべき本校諸學の教育に在りては、將來戰を考慮して、生徒の修學目標を明確にし、絶えず之が具現に努め、且實際との間に罅隙なからしむるを要す。而して特に根本事項の徹底的教育と諸學科の全一的指導とに勉め、演練を重んじ、以て創造の叡智と實行力とを高むること緊要なり。本校に於て實學と稱するは即ち是にして、生徒が將來擔當すべき重要な仕事をする爲必要な強き力を與ふるを主眼とす。

若し夫れ廣く知識を附與せんとして、徒らに廣正面の注入教育に始終せんか、二十歳前の重要な本校教育に於て創造性は發達の機會を失ひ、偉大なる創意工夫の如きは其の將來に於て望むべからざるに至らん。

- (ロ) 直觀力は主として清新なる感覺の洗煉と眞劍なる反復演練及實際の體驗に依りて發

達し、想像力は主としての確なる基礎に立つ豊富なる経験及熱誠なる精神集中に依りて其の力を發す。

(ハ) 指導者は生徒に對し、巧に創意工夫の動機を得しめ、又適正なる著想を起さしむること緊要なり。之が爲所要の示唆を與へ、勉めて自發的努力に出でしめ、要すれば指導を加へ、時として著想を示し工夫せしむる等不斷の配慮を必要とす。

上官平素の苦慮せる問題が圖らずも部下の工夫に依つて解決せられたるが如き事例、上官の一見嚴に過ぐるが如き要求に依り部下の創意遂に奏功を見たる事例等の少からざるは味はふべき點なり。

(ニ) 専心没入し而も大所高所に立てる觀察を忘れざるは、克く各種の示唆を捕捉して適正なる著想を得ると共に之を完成するの要道なり。

(ホ) 各自の創造的稟質に對し適性教育を施して其の長所を發揮せしむることは效果甚大なり。一見價值少きが如き著想も、生徒の熱意を活かし性格に應ずる修正を加へ、努めて試行せしむるを可とす。

(3) 創意工夫の爲得たる前記の著想は、其の高次なるに従ひ實現完成に要する努力亦多大なるを通常とす。故に不屈不撓、周到なる學的思考、精緻なる實驗觀察、戦場の教訓等

に依る徹底的究明に努むべし。

(イ) 學的思考に在りては、事象の實相、本質を把握し、其の軸心、急所に着眼する爲組織的且繼續的の究理並に眞實且整然たる判斷を必要とす。之が爲觀察力、推理力、想像力、洞察力等に關し、精細にして且全一的なる科學的態度を演練せざるべからず。

(ロ) 實驗觀察に方りては、清明正直、以て對象に没入し、宇宙の理法に觸るるが如き態度たるべし。而して實驗觀察の結果處理に於ては、性急なる結論の導出を戒め、苟も疑義あらば之を徹底的に究明せざるべからず。

(ハ) 著想の實證に失敗せるときは、之が原因を追及闡明して更に新たなる著想を生み、毅然たる自己信頼感を以て不屈不撓之が完成に邁進すべし。失敗の教訓は成功の教訓よりも大なること屢なり。

(ニ) 戦場の教訓は貴重なり。特に戦争中に在りては最も速かに其の教訓を活用して、戦法、訓練、兵器、情報、宣傳、宣撫等有ゆる方面に互り、時々刻々工夫を凝らして改善を加へ、獨創を生み、敵の意表に出づること極めて緊要なり。之が爲日常の教育に於ても戦場の教訓を示して之を活用せしむると共に、克く先制の神髓を味はひ、更に之を超越して新機軸を出すの修練を行ふを要す。

(4) 思索研究の基礎たるべき學的識能の附與に方りては、特に實際に即する科學的態度及方法の演練に著意し、程度の進むに従ひ既知既習の事項を段階とし、要すれば之を超越し、自ら必要を豫見して問題の所在を發見し、之に對處するに到らしむるを要す。

(イ) 生徒の教育に方りては、單に基礎的知識の附與に止ることなく、又徒らに創意工夫に依りて得たる成果の如何に拘ることなく、寧ろ創意工夫の基礎的過程たる科學的態度及方法、換言すれば創意工夫を目標とする「見方、考へ方及之に伴ふ實行力」の演練を重視すべし。

先人の行迹に學ぶことは極めて有益にして、其の際に於ても成し遂げたる結果の偉大なるに瞠目することなく、其の因つて來りし所を學び取り、之を身に着けしむることとに著意せざるべからず。

(ロ) 諸學は必ずしも既成の體系に拘泥せず、又之を完成固定せるものとして授くることなく、日進月歩の問題として動的に指導し、應用性と發展性とを與ふるを要す。

(ハ) 基礎的識能の超越發展の爲には、教育の進むに従ひ生徒をして既成の觀念、形式に止らしむることなく、思を將來及全局に馳せ、新發展の方向を思索しつつ、或は新たな技術を應用し、或は異なる觀點より見、或は異なる梯子を以て測り、或は異なる方

法を以て試行の反復を敢行せしむる等、進取潑刺たる努力を爲さしめざるべからず。

創意工夫の爲の教育は、先づ模倣を幾何も出でざる創意に始り、次いで既成の觀念、形式より甚だしく遠からざる觀點又は梯子に依つて創意せしめ、遂に大なる創意工夫に慣れ、必勝の信念の重要要素たるに至らしむべきなり。

(5) 以上の外、創意工夫の教育に方り著意すべき諸件左の如し。

(イ) 居常卑近の間にも創意工夫を施すの餘地大なり。即ち之に依り一は日常業務の成果を向上すべく、一は興味及企圖心を増して漸次創意工夫を凝らすの習性を得るに至る。然るに日常のことは動もすれば惰性に流れ易きを以て、克く生徒の心理状態を把握し、日々指導又は示唆を與へ、心を新たにし、行住坐臥總て創意工夫の對象たらしむること緊要なり。

(ロ) 創意工夫の實踐は環境に左右せらるること多し。故に之が整備に努め、特に學校の雰囲気や創意工夫に向つて向上せしめ、考ふることを尊重し、創意の成果を稱揚する等、文武一體、歩調を揃へて適切なる指導と有效なる鼓舞激勵とを與ふること緊要なり。

(ハ) 一見不可能に見ゆる件、突如發生し困惑に陥る件等一時對策に窮する問題も、創意工夫の如何に依り必ず解決の方法あることを好機を捕へて體認せしめ、或は之に類す

る實例を説示し、以て如何なる難關にも不屈邁進せしむるの意氣慣習就中自己信賴感を養ふこと緊要なり。歴史の教育、演習其の他に於て屢、其の機會を發見すべし。

(二) 創意工夫は一致協力に依つて奏功し、又は其の成果を一層大ならしむること少からず。故に協同課題作業、協同實驗、他人の作業援助、各種考案の綜合整理等の訓練に著意すべし。

協同研究に方りては常に虚心坦懷進んで意見を開陳する積極的態度、克く他を容るる謙虛なる雅量、甘んじて無名の勞に服する犠牲的精神を涵養すること必要なり。

(ホ) 生徒は將來軍の植榦たるを考慮し、自ら創意工夫以て難局打開に挺身するのみならず、部下の創意工夫を育成培養するの要あり。之が爲他人の創意工夫を尊重し其の意見を容れ、又進んで之が援助協力をなすの態度を養ふべし。

(ハ) 既に述べたる如く、創意工夫の爲經驗は特に大なる價值を有し、之を助くるものに先人の行迹、他人の經驗、部外の人より受くる示唆等あり。而して之を最も容易に爲し得るは讀書なるを以て、適切なる參考書を示し、且生徒の能力に應じ其の教訓の捕捉を助くる等讀書指導に著意すること緊要なり。

(三) 結言

今や彼此相益するが如き世界文化の交流は斷絶しあり。將來に互り此の情勢は寧ろ常態と考へざるべからず。而も世界民族の抗争は、現に戦へると否とを問はず、益、苛烈を加ふべし。其の苛烈の陣頭に立たしむべき本校生徒の教育に在りては、眞に必勝を期待すべき要素を具へざるべからず。此の要素中重要不可缺なるものの一は創意工夫なり。創意工夫の教育要素は、熱と誠とを以てする強力なる實踐を最も重しとす。教育者は宜しく率先垂範、其の自ら能くするものに在りては卓越せる目標を示して指導し、其の未だ自ら之を能くせざるものに在りては師弟同行俱學俱進し、目的の達成に邁進せざるべからず。

附録第二 振武臺に志す青少年を指導せられる方々へ

本書は序文や跋文によつても明かであるやうに、世の指導者に對して何等かの参考たらしめ、併せて振武臺に志す青少年を實際に教導せられる際の指針たらしめんことを期し、振武臺の教育の實相を紹介するのが主眼である。従つて高尚なる教育論を言擧したり事實を誇張したりした所はないから、讀者は率直に其の内容を読みとつて貰ひたいと思ふ。此の書物は恐らく振武臺に志す青少年によつても緝かれる機會が多からうと思ふが、其等の諸君も亦虚心坦懐に讀んでほしい。さうすれば振武臺の教育に就き、色々の點で相當に認識を深められると思ふ。

今や皇國の隆替正に決せられんとするの機局に方り、學徒は既に通年動員せられて日夜工場や田園に於ける勤勞に従事してゐる。斯かる勤勞作業場裡の學徒は固より、また早くより産業の第一線に於て敢闘しつつある若人、或はお召を奉じ銃劍を執つて戦陣に挺身しつつある若き勇士等、今日の青少年は國家の運命を其の双肩に荷つてゐる。されば此の間に處して其等の青少年の勉學を指導せられる方々の辛苦は、蓋し我等の想像の及ばぬものがあるであらう。各位は今日の青少年に明日への方向を明示して、徒らなる迂路を辿らしめざらんことに就き並々ならぬ御苦心を拂はれてゐることと信ずる。本書若し其の間に在つて聊かなりとも参考とならば

寔に仕合せである。

◎本年度の入學試験作文の文題は「勤勞の體驗」といふのであつたが、其の答解の中には幾多の参考とすべきものがある。生徒は學校の教室に於てのみでなく、工場や田園に於て幾多の教訓を學びとつてゐる。次に工場に於ける指導者の率先垂範が如何に青少年に好影響を與へたかの一例を掲げてみよう。

「頭なか」小隊長の號令によつて、空箱の上のみすばらしい一老人に我等報國隊員一同は目を注いだ。つばのひねくれ上つた戦闘帽、汗と油で汚れた作業服、破れて指の見えるゴム靴、それはよごれた老人にしか過ぎない。此の大きな工場を全責任を以て預つてゐる工場長とはどうしても思へなかつた。我々は工場長と言へば相當にみなりの整つた人かと思つてゐた豫想が裏切られた。こんな人の下で仕事ができるのかと内心不安にさへなつたが、受持作業の材料分配を慣れぬ手つきで、或は人力で或は動力でやつてゐると、自然にそんな氣持も忘れて愉快になつて來た。

或る作業場に鐵管を持つて行くと、そこに今朝の老人を發見した。思はずハツとして見ると半裸となつてハンマーを懸命に振るつてゐる。おゝ見よ、其の隆々たる筋肉を、血走つた目を。熔鑛爐の灼熱した焰に映えて全身の玉の汗が眞赤に光る。何といふ凄絶な繪であらう

か、握つてゐた拳に汗がにじみ出るやうな氣がする。あの今朝がたの老人かと今一度顔を見直したが、やはりさうだ。よぼ／＼な所は何處にも見られない。我等は感に打たれて其の場を離れた。

晝休みのサイレンが鳴つた。學校報國隊出動第一日であつたから、特別に全工員を集めて我等と共にあの工場長の訓示があつた。

今朝のままで、今朝の空箱の上で、工場長は靜かに語り出した。其の時我々は再度驚かざるを得なかつた。其の口から出る一言一句は、熱烈火を吐く如く、愛國者の叫びに外ならぬのだ。斯ういふ人こそ陣頭指揮の第一人者である。ようし、十日間此の人の下で我等はがんばるぞとお互に誓ひ合つた。話終へた工場長は、もう今朝の老人ではなかつた。空箱の上の破れた靴も洋服も顔も皆光つてゐた。

至誠に發し寸毫も犯すべからざる指導者の率先垂範の有する大いなる力を、我等は大東亞戰爭下の今日に於て今更の如く痛感せざるを得ないのである。本校に於ても幹部の率先垂範といふことに就て、現校長は強く職員に要望せられる所があり、學校は舉げて實行の迅速と共に其の徹底を期し以て全軍に範たらんとしつゝあるのであつて、此の一點に於て内外全く其の軌を一にしてゐるといふべきである。我等は世の指導の任にある方々に對し、例へば此の率先垂範

といふやうなことを手懸りとして、振武臺に志す青少年の指導に一段の工夫を重ねられんことを願つて止まない次第である。

◎抑、將校は皇軍の樞軸、皇國元氣の樞軸であつて、入りては精銳必勝なる皇軍の鍊成に任じ、出でては關外の重責を完うすべきものであり、また一般社會に伍しては之が儀表とならねばならない。従つて將校生徒は所謂「お坊ちゃん」育ちであることは許されない。常に百難と戰つて粒々辛苦し、遂に之を克服するの氣概と實力との持主でなければならぬ。例年生徒の入校時には「我が生立」とか「私」とかいふ類の自己の經歷や面目を淡白に敘述した文章を綴らせるのであるが、其等の文章によると生徒は何等かの意味に於て、大なり小なり苦難を突破して來てゐる者が多い。例へば戰野に父を失うて母に日夕不斷の孝養を捧げ、或は家運衰微の極に在つて蜜柑箱を机として勉強を続け、或は晝間の激務ののち夜學にての修學を怠らず、或は不毛の戰野に在つて敵彈下に身を曝しつつ毅然として飽くまで勉學を続ける等といふやうな、それぞれ/year輩に應じての一方ならぬ辛酸を嘗めたものがすくなくない。思ふに人の一生は、盤根錯節ともいふべき憂患に見舞はれることもあれば、順風滿帆といふが如き順境に恵まれることもある。然し其の環境の順なるにもせよ、逆なるにもせよ、よく自らを持すること嚴に、鞏固なる意志を以て飽く迄目標に精進する者だけが其の素志を貫徹し得るのである。由來陸海軍の選抜

試験は難關と稱せられて來たが、此の關門を突破し得た者は結果から見ても燃えるやうな闘魂の持主であることが多いのである。以下に最近の作文の中から「我が生立」なる文章を掲げ、以て將校生徒搖籃時代の情況の一斑を偲ぶよすがとしよう。

其の一

大正十二年の紀元節の朝、私は一介の職工の三男として武藏野の一角に呱呱の聲をあげた。小學校に入るや向學の至情日と共に昂まり、上級學校進學の希望切なるものがあつたが、家庭の貧困我が志望を叶へるに由もなく、高等小學校を終へると共に所澤飛行學校に一見習工として勤務することとなつた。

偶々支那事變に於て長兄の北支の空に散華するや（航空操縦者にして自爆）勃々たる復仇の念止み難く、我も亦大空に散らんと覺悟を定めて少年飛行兵を志し、數々の努力報いられて遂に操縦者として軍務に服することができるようになつた。時恰も大東亞戰爭勃發し、直ちに命を受けて大陸に飛び、中支、北支の奥地に轉戦して幾度か戰鬪の經驗を經た。其の後内地歸還を命ぜられて太刀洗飛行學校附となり、少年飛行兵、下士官學生、特別操縦見習士官等の指導に任じた。其の間我が家の生計も多少向上して弟も中學に入つてゐたが、丁度此の頃次弟は陸軍豫科士官學校に入學を許可せられた。其の報知に接しては兄たる自分も斯くて

はならじと、日毎愛機を大空に驅るの傍ら、寸陰を惜んで勉勵につとめ、其の翌年遂に陸士合格の幸運に浴した。此の時奇しくも自分の次の次の弟も中學四年から受験して同時に合格し、我等は既に修武臺に學ぶ弟と共に兄弟三人同じく陸士に學ぶの光榮を擔ふこととなつた。

自分は今年二十三歳であるが、再び天空を翔破する日を待望しつつ、日夜渾身の努力を以て學科術科に精勵してゐるのである。

其の二

私は昭和二年六月八日、北海道小樽市に生まれた。生まれると間もなく一家は東京に移住したので、純粹とはいへないが江戸っ子と稱してよからう。小學校時代は本所で過したが、其の六年間は毎日の如く先生に叱られ、友達ともよく喧嘩をした。小學校を卒業すると同時に府立の四中に進んだ。此の中學時代は勉強と運動との外は何もしないといふやうな眞面目な生活を續けた。父は豫て自分を軍人たらしめるやうに熱望し、自分も平素から之を宿願としてゐたので、一年の終りに幼年學校を受験して幸ひに合格した。今日まで私は試験といふものに不合格になつたことがない。此の點誠に運のよい男だと思つてゐる。幼年學校に於ては三年間の將校生徒の生活によつて軍人精神を教へられ、將校たるべき素地を築くことができた。

元來自分は精神的に人に負けたことはない。自分は意地によつて成長して來た。偶、昭和十九年一月、父を大東亞の空の戦線に喪ふや、自分の意地は父を墜した米英に向けられた。乃ち自分は將來修武臺に學び、必ずや大空に戦うて父の遺志を全うし御奉公の誠を盡くすことを堅く覺悟してゐる。

其の三

私は青々とした稻田が四周に廻つてゐる千葉の片田舎に生れた。そして柔かな陽光と澄み切つた大氣との中に成長を續けた。十歳のとき東京に移轉したが、農村に幼時を送つた私にとつて、朝日夕日の美しい景色の眺められない東京の生活は淋しかつた。然し間もなく東京の生活にも慣れて、やがて中學校へ進んだ。最初自分は醫者、それも軍醫になる積りであつた。だが日支事變が段々進展して來るに伴つて兵科將校を志望する熱意が段々強くなつて來た。それは父が幼時足を怪我したのが因で徴兵検査の結果丙種合格になつたといふ不面目を挽回しようといふ氣があつた爲でもある。中學の五年のとき陸軍豫科士官學校を受験するといふ決意を父に述べたところ、父も母も非常に喜んでくれた。然し其の年の試験の結果は、自分の不勉強の爲不合格になつてしまつた。一年間の所謂浪人生活が續いた。が然し此の二回目の試験にも失敗した。此の關父母は常に私を慰め勵ましてくれた。一方私は現役兵を志

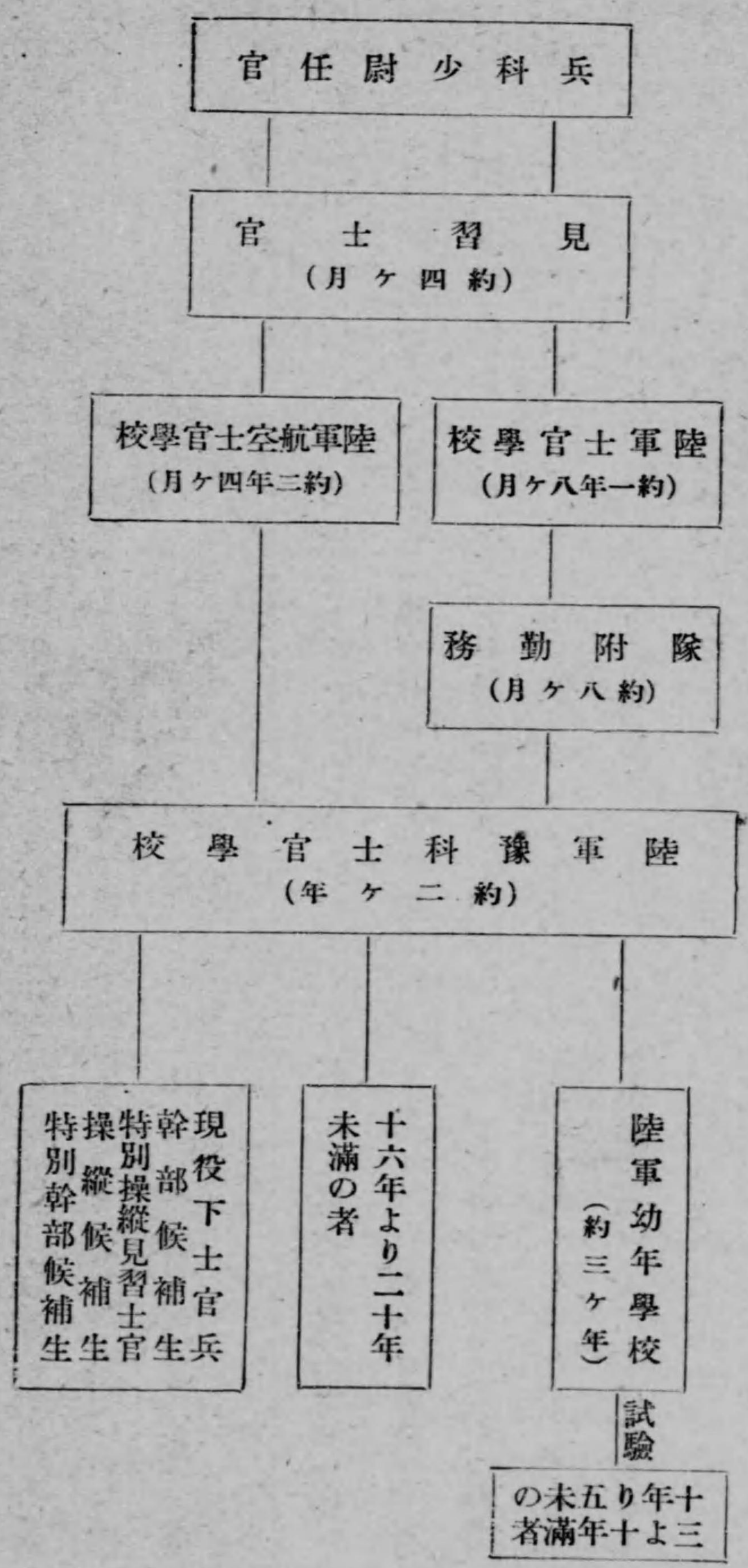
願して幸ひにも飛行兵に採用せられ不日入營することとなつた。此の頃丁度第三回目の陸士の試験が來た。私は若し今度も不合格となれば飛行隊入隊の上更に二十六歳まで何回でも受験する牢固たる心組であつた。愈、三度目の試験に方り固い決意を以て試験場に臨んだ。最後まで頑張つた。そして十一月三日の發表日を心待ちしてゐたが、其の日の夕方になつても私には通知は來なかつた。然し私は悲しみはしなかつた。天は決して自分を見捨てはしないのだ。これは天の自分に與へた試験なのだ。自分は斯う思つて、勵まう、戦はうと生まれ故郷の千葉を指して歸つて行つた。これから入營豫定の來年八月まで、毎日近所の農家へ勤勞奉仕をしつつ勉學しようと日課を定めたのであつた。生まれて始めて眞心を以て稻に手を觸れてみたのも此の頃である。自分は悠久の昔から傳はつてゐる祖先の息吹きを沁々と稻の重みの中に感じた。夜空を仰いで「自分は努力が足らぬ、こんな事では皇軍將士に濟まない」と思つたことが何度あつたか知れなかつた。

三月十八日の正午頃、思ひもかけず東京の父から電報が來た。夢にまでみてゐた陸士採用の通知である。此の年は採用通知が何回にも分けて出されるといふことは豫て聞いてゐたが、自分は今年始めて合格といふ喜びを味はふことができたのである。まるで夢のやうだ。數々の思ひ出が次々に浮んで來る。小學校以來の恩師の顔が涙の中に霞んで見える。私は早速祖

先に此の事を報告した。佛壇の燈明が何時もより明るいやうに感ぜられる。

今年の三月二十五日、父と共に勇躍して陸士の門を潛つた。此の日、父と共に本部の菊花の御紋章の前で最敬禮をしたときの感激は、終生忘れることができないであらう。

◎凡そ「陸士」を経て現役將校になるには各種の方法があるが、今之を圖示すれば次の通りである。但圖に示す修業年限等は苛烈なる戦局に應じ、多少變更せられることがある。



右の圖によつても明かなやうに、陸軍豫科士官学校に入校するには三つの徑路がある。即ち陸軍幼年學校を経由して來る方法、十六歳(滿歳、以下之に準ず)から二十歳未滿の者にして選抜を受けて進學する方法、陸軍部内から現役下士官や現役兵、幹部候補生、特別操縦見習士官、操縦候補生、特別幹部候補生にして同じく選抜を受けて進學する方法の三つがそれである。

右の中陸軍幼年學校から振武臺に進學せんが爲には、先づ陸軍幼年學校の選抜試験に合格しなければならぬ。陸軍幼年學校の志願資格は年齢からいへば十三歳から十五歳未滿の者で、學歷には何等の制限はない。學科試験の程度は中學校の第一學年第二學期修業の程度であるから、大體からいつて國民學校高等科または中學一、二年在學中の者は受験資格があるわけである。陸軍幼年學校の選抜試験に合格したものは全國に六つある次の諸學校の何れかに入校することとなる。これは豫め其の入校學校を希望することができる。

- 東京陸軍幼年學校
- 仙臺陸軍幼年學校
- 名古屋陸軍幼年學校
- 大阪陸軍幼年學校
- 廣島陸軍幼年學校
- 東京都南多摩郡横山村
- 仙臺市富澤町
- 愛知縣東春日井郡篠岡村
- 大阪府南河内郡長野町
- 廣島市基町

陸軍幼年學校の教育は各校とも同一の教育精神と教育計畫との下に行はれる。そして將校生徒達は武人の修養に好適の地に於て三年間の課程を終へると、南から北から同時に振武臺に進學して來るのである。此の際には所謂選抜試験と稱するものは行はれない。

次に十六歳から二十歳未満(將來改正せられることがあるかも知れぬ)の者にして選抜を受けて進學する方法といふのは、今日最も其の志願者の多い部面であつて、中學校は勿論實業學校などから陸士を志願するといふのはこれである。然しこれも決して學歴に制限があるのではないのであつて、概ね中學校の第四學年第一學期修業程度の學力があれば誰でも志願することが出来る。不幸にして陸軍幼年學校の選抜試験に不合格になつても、陸士を志願し合格すれば、幼年學校へ行つた嘗ての國民學校や中學校時代の級友と机を並べ得るのである。一旦振武臺に入校した上は、兩者別に何等の差別があるわけではない。

次に陸軍部内から陸軍豫科士官學校を志願する者に在つては、其の取扱略、前記の趣旨に準ぜらるべきも、ただ年齢は現役下士官にあつては二十六歳未満、幹部候補生、特別操縦見習士官、操縦候補生、特別幹部候補生(以上總て階級は關係なし)、現役兵にあつては二十五歳未満迄緩和せられてゐる。従つて苟くも陸軍の現役將校たらんことを志す者は十三歳から二十六歳の

間に於て其の素志を貫徹し得る便宜と機會とが與へられてゐるわけである。昭和十九年度の入學試験を南方第一線「ニューギニア」の空中戦に参加の傍ら受験し、遂に之に合格した若き軍曹があつた。此の下士官は少年飛行兵出身であつて、既に空の要塞を撃墜したといふ戦歴もあつた。激しい空中勤務の傍ら寸暇を探しては勉學に勵み、夜は燈火管制下の乏しい光の下で修學にいそしみ、遂に其の初一念を貫徹したのであつた。

◎以上は陸軍豫科士官學校に入校する三つの方途に關して述べたものであるが、此等に就ては毎年陸軍省告示を以て示されるから、指導の任にある方は、之によつて出願の手續、願書の取扱等を承知せられたい。又志願者の心得べき一切に關しては志願者心得及願書用紙(志願票)に據られたい。今日までの例によれば、此の告示の出る頃には教育總監部に於ては志願者心得及志願票を調製して全國に配布してあるから、志願者は師團又は軍司令部兵務部、聯隊區司令部(朝鮮、臺灣、關東州、滿洲國、支那に於ては兵事部)若しくは教育總監部、陸軍豫科士官學校、各陸軍幼年學校何れにでも請求すればよい。昨今は年度によつて志願票の受付期日其の他の要領が變更せられることがあるから、毎年其の年の志願者心得を熟讀することが必要である。中學校等に在學中の者や卒業生は出身校の陸軍軍事教官に色々教示して貰ふと便宜である。

陸軍豫科士官學校に入校前後の事情は本文中にも述べてあるが、採用者には學校から正式に

色々連絡があるから其の指圖に従へばよい。採用者に決定されさへすればといふやうな氣持で、着校までの貴重な時日を空費するやうなことは極力戒むべきことである。此の點特に指導の任に當られる方々にも一層の御配慮を煩はしたいと思ふ。

◎以下身體検査の要領に關して注意すべき二三の事柄を述べる。

(一) 従來陸軍の學校は視力を非常にやかましくいつたものであるが、陸軍將校としては多少眼が悪くても御奉公の出来る途があるので、最近はや青年の熱烈な志望を叶へる爲、視力に就ては縦ひ軽度の眼病があつても〇・六以上あれば合格する。又近視遠視で〇・四或は〇・三であつても、二「ディオプトリー」(二〇度)以下の球面鏡を掛けて〇・八以上見えれば合格である。色盲でも合格する。但中等症以上の「トラホーム」は視力に關係なく不合格である。

然し由來身體の健否を左右する根本的の事項特に胸部疾患に就ては周到に検査せられる。

(二) 凡て一應合格しても入校の爲着校の際には、再び身體検査が行はれる。此の際には餘程親心を以て見られるし、縦ひ不合格になつた者でも希望者は翌年度入校時迄採用者としての既得權を保ち、一年後に再検査をして貰へることもあるといふ規定が新に出された。此の際の不合格の大部分は結核性疾患であり、一部分には腎臟炎、痔瘻の稍、重きもの等がある。然し全般から見れば極く少數に過ぎないから大して心配すべきではない。

◎尙最後に一言する。それは従來陸士や幼年學校に志願する者に在つては、軍人の子弟に特に便宜の與へられるやうな誤解や、或は要路の誰かに頼み込めば効果があるかのやうな誤解のあることに關してである。凡そ選抜採用法の嚴正公平なことは各位の想像以上であつて、此のことは知名の將軍や本校教官の子弟にして幾多不合格者の多き事例を見ても明かなことである。以上によつて本章の敘述を終へるが、之が振武臺に志す青少年を日夜教導せられる方々にとつて何等かの指針ともなれば幸ひである。

振武臺の教育

出版會承認 う一八〇一一五號
承認部數 五〇、〇〇〇部

昭和十九年十月五日 初版印刷
昭和十九年十月十日 初版發行



◎定價 二圓
特別行爲税
相當額 十錢
合計賣價 二圓十錢

著者 陸軍豫科士官學校
高等官集會所

代表者 宮野 正年

發行者

東京都小石川區小日向水道町八四番地
株式會社 開成館

代表者 渡部 涉

印刷者

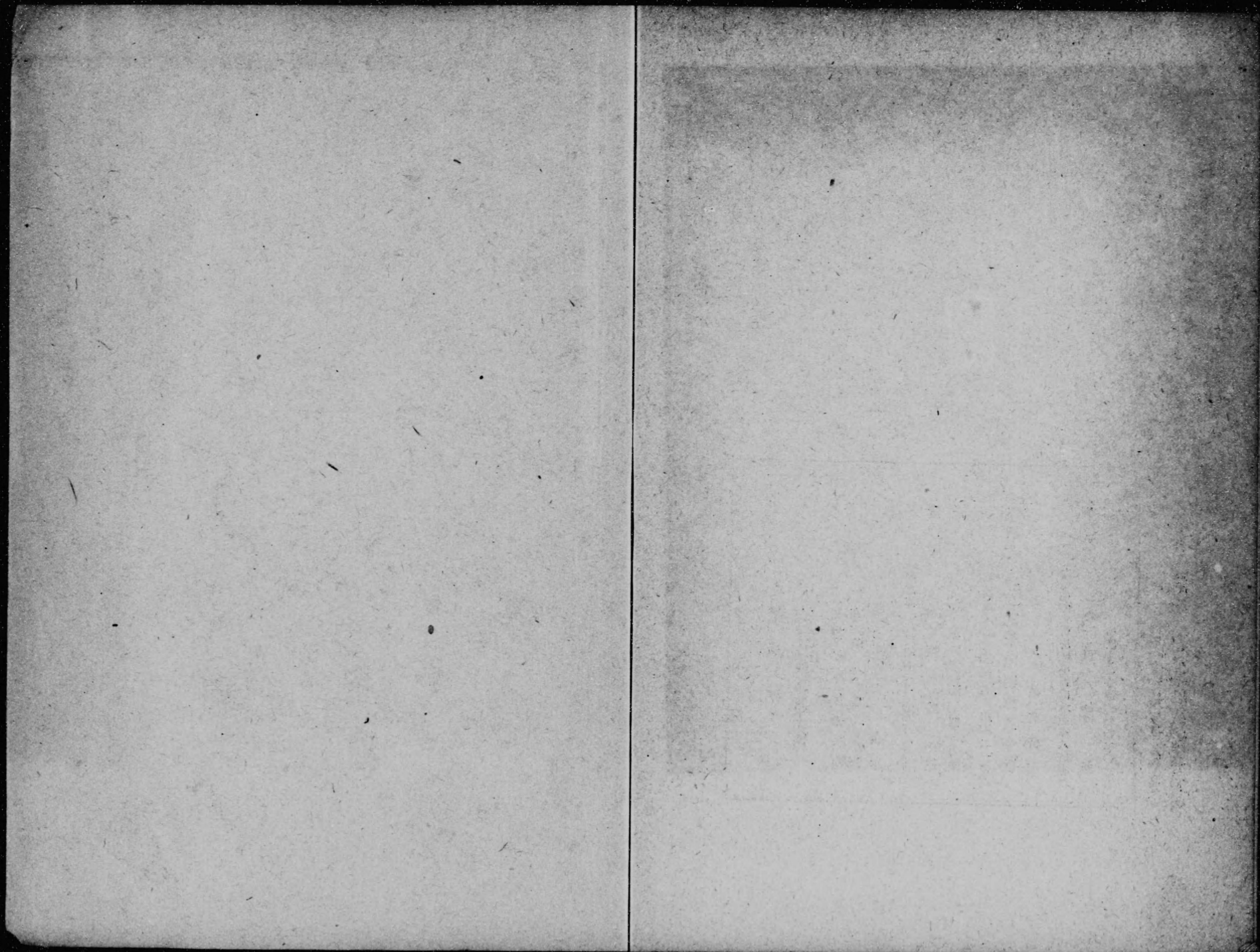
東京都小石川區西江戸川町二一番地
(東京) 富士印刷株式會社

代表者 佐藤 精亮

發行所

東京都小石川區小日向水道町八四番地
株式會社 開成館
出版會員番號三四〇二〇三番

東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給統制株式會社





20年 / 月 22日 20

0	0								



